哲學研究　第七十六號　第七卷　第七册

カントに於ける認識客觀性の問題（承前）

岡野留次郎

十

吾々は既にカントに於ける認識の質料の意義を討究し、如何にして其先驗的根據付けをなし得るかを明にした。即其先天性の基く根據を最も具體的にして直接的なる意識、カントの純粹統覺の綜合的統一としての先驗的意義(transscendentales Bewusstsein)に基づかしめることに依つて、個人心理學的に主觀が外物に感觸せられ、其結果與へらるゝ感覺を認識の質料と認める論理的不整合を排斥することに依つて、其先驗的演繹を遂行することを得た。此に於て我々は更に進んでカントが認識の形式と呼んだもの、即感性の形式たる時空の純粹直觀並に悟性の形式たる範疇の先驗的

演繹を成遂げねばならない。

併し此問題の解決に進むに先つて、カントに於ける對象の意義を、多少の重複を厭はず、更に論究し置くを便宜と考へる。何者先天的要素の先生性の基く根據を明にする爲に、之等の要素が對象に依つて可能ならしめられるのではなく、却つて之等の要素が逆に對象を可能ならしむる所以の論究を必要とするならは、かやうな對象とは抑々如何なる意義を有するかを一義的に決定し置くことは、之等先天的要素の先驗的演繹をなすに當つて、豫め論究を要する重要なる問題たるは爭ひ得ないからである。

扨てカントが對象と呼んで居るものに、三通を區別し得る。第一は先驗的美學に於て主として現はれて居る感覺の對象 (Gegenstände der Sinne) であり、第二は先驗的論理學の分析論中悟性概念の先驗的演繹に現はれ來る先驗的對象 (transscendentaler Gegenstand) であり、第三は判斷力の先驗的教說 (transscendentale Doctrin der Urteilskraft) 以下先驗的辯證論に渡つて議論の樞軸をなす可能的經驗の對象 (Gegenstände der möglichen Erfahrung) である。

感覺の對象は又感性の對象 (Gegenstände der Sinnlichkeit) 或は直觀の對象 (Gegenstände der

Anschauung) とも呼ばれて居るものであつて、カントが現象と呼ぶものゝ本來の意義は此對象に附隨する。何者、カントに依れば不可認識なる物自體が現象するのは、それが我々の感性を感觸し、感覺的影響を心 (Gemüth) の上に與へるが故である。感性的直觀でなく、知的直觀を具有する生物に對しては、物自體は現象するのでなくして、其儘に (an sich selbst) 認識せらるべき筈であるからである。夫故にカントは現象を定義し「經驗的直觀の不確定な對象を現象と呼ぶ」(S.48) と說く。此處にカントが不確定 (unbestimmte) と云つて居るのは、云ふ迄もなく未だ悟性の協力を俟たないが故である。かやうな現象の雜多は、併し乍ら、單なる直觀の雜多として、未だ眞の意味に於て、對象を構成するとは云ひ得ない。何者眞の認識の對象とは單なる表象の雜多でなくして、それが客觀的實在性を有しなければならないからである。之を云ひ換へれば、感性の對象と考へられた表象は、更に表象として、或對象Xに關係しなければならぬ。然るに此對象Xは最早や感性の對象でないが故に、非感性的從つてカントの意味に於て先驗的である。かやうな對象、卽現象の背後に存し現象をして單なるSchein たらしめず、之をして客觀的實在たらしめるもの、我々の認識をして一般に或對象への關係を有せしめるもの、これをカントは先驗的對象と呼ぶ。夫故に此概念は

何等一定の直觀を包含しない。認識の雜多が單なる雜多でなく、それが或對象と關係する限りに於て、雜多の上に顯現する統一に關係する。此統一こそは雜多の對象への關係をつくるものであり、又軈て意識の必然的統一、雜多を統一する意識の綜合的統一其者に外ならぬ。されば先驗的對象とは、意識の綜合的統一の客觀的の見方に過ぎないとも言ひ得やう。然るにカントに於て認識の質料としての感覺は意識以外から與へらるゝものとの經驗心理的見地を捨て得なかつたが故に、意識の綜合的統一は統一せらるべき內容を他に俟つと言ふ意味に於て、暫らく內容を離れた統一の相として現はれる。從つて其雙關者としての先驗的對象と感性の對象との間には、一は先驗的であり、他は經驗的である點に於て、連關せしめらるべき紐帶を必要とする。かやうなものとしてカントは可能的經驗の對象を考へた。先驗的對象が意識の綜合的統一に基くとは、それであるからして、凡そ對象一般は意識の統一的原理に基くとの意味に解すべきである。併しかやうな意識の統一的原理は、內容を離れては全然其意味を失ふが故に、そは內容への、從つて感性の對象への必然的の Anwendbarkeit を豫想する。先驗的對象がかやうにして感性の對象に關係することは、他面から云へば、意識の綜合的統一が對象一般を可能ならしめる根據として、經驗的認

識卽カントの經驗に關係することを意味し(S. 669)應て經驗を可能ならしむる根底であり、從つて可能的經驗の對象構成の根據となる所以である。

以上カントの對象概念に對する三樣の考案を略述したのであるが、こは一方カントに於ける認識客觀性の根據付けの發展の三階段に應ずると共に、他方一般に認識對象の問題に重要なる旨趣を有する。何者我等の解する所に從へば、カントの先驗的對象に關する考案は、對象一般に關する考案として認識對象規定の第一問題に屬し可能的經驗の對象の關する考案は、之を廣義に解ずれば、認識對象の領域全般に關する考案と見得るのであるが、之を狹義に解する時は、數學的自然學の對象の世界に關する考案として、認識對象規定の第二の問題に屬し最後の感性の對象に關すを考案は、知覺的經驗の對象界卽個物、事物の世界に關する考案として、記載的自然科學の對象の世界を暗示するもの、認識對象規定の第三の而して最後の問題に屬するものと見得るからである。併し、之等對象概念相互間の論理的關係を論究するは、カントに於ける認識客觀性の基礎付けの第三の段階、可能的經驗の問題に屬するが故に、今は只對象概念に對するカントの三考案を顧みるに滿足し、進んで時空並に悟性概念の先驗的演繹に趨かなければならぬ。

扨て、時空並に範疇の先驗的演繹に於てカントが採つた方法は、今迄述べて來た對象概念に關するカントの考案に依つて略明にせられたと信ずる。何者、X先驗的對象が感性の對象に關係することに依つて可能的經驗の對象界を顯現する事は、意識の綜合的統一が認識の質料たる感覺或は更には直觀の雜多に働きかけることに依つて、凡べての認識を成立せしめ構成すると見ると同じであるからであり、時空並に範疇の先驗的演繹とは既に述べたやうに之等が可能的經驗成立の先驗的條件たることを明にすることであるが故に、若し、意識の綜合的統一が可能的經驗成立の最高の根據であるならば、そしてそれが感覺に對して必然的に關係せしめられなければならないとすれば、感覺的所與の雜多の中に綜合的統一が顯現する種々の形式として、必然的に時空並に範疇を必要とすることが論證せらるれば之應て、時空並に範疇の先驗的演繹に外ならぬからである。

十一

所がカントに依れば、質料は必ず意識以外から與へらるべきであるが故に、そして我々人間にあつては、感性的直觀を通じての外は、總じて對象は與へられ得ないが故

に、時空が感性的直觀成立の純粹形式である限り、時空が對象構成の必然的要素たるは自明の理と考へられる。併し範疇に至つては、悟性の判斷形式に基いて發見したものである。かやうな範疇が如何にして感覺的所與に關係し得るか直議的雜多と關係し得るかは、重要なる問題を構成すると云へやう。之カントが特に純粹悟性概念の先驗的演繹なる章を設けて詳論せんとした思惟動機に外ならぬ。

感覺的所與延いては直觀的雜多が凡そ對象と關係せんが爲には、先驗的意識の自己同一、先驗的統覺の綜合的統一に基かねばならないことは既に明にした所である。何者、凡そ對象とは一般に直觀的雜多の中に顯現せらるゝ意識の綜合的統一の反面に外ならぬからである。夫故に直觀的雜多は必ず與へられなければならない、そして意識の綜合的統一は之と關係しなければならないと言ひ得ると同一の理由を以て、直觀的雜多は先づ先驗的意識の綜合的統一を豫想しなければならなくない、そして、直觀的雜多は必然的に其綜合統一の下に立たなければならないと主張せられ得るであらう。實にカントにあつては所與性の原理と所惟性の原理とは經驗的對象卽我々が自然と呼ぶ認識對象の世界を構成する上に不可缺の二つの原理である。然るに今時空が直觀的雜多の與へらるゝ場合の必然的形式として其先驗的演繹が

なし得られたと同樣に、判斷形式の探求によつて求め得られた範疇が、先驗的意識の綜合的統一が直觀的雜多に關係する必然的形式たることが明にせらるれば、其先驗的演繹が成し遂げられるであらう。然るに、範疇とは既に述べたやうに判斷の根本形式であり、悟性作用は判斷作用に存すると見得るが故に、判斷の根本形式は悟性の根本作用の形式と見られ、そしてそれは悟性の綜合的統一の作用に外ならぬと知るならば、悟性の最深の奥處に横はり同時に直觀の根底ともなる先驗的統覺の根源的綜合的統一作用が其透徹的必然的同一性を現はし得るのは範疇の形式に於てゞあることは自ら明であらう。之を云ひ換へれば先驗的自我の統一作用が直觀的雜多に關係する場合には、範疇なる綜合的統一作用の形式を取らなければないと云ひ得る。それにしても、先驗的統覺作用が感性的直觀作用に關係するが爲には、其仲介となる他の先驗的作用を有しなければならないやうに思はれる。かやうな主觀的根據としてカントは想像力 (Einbildungskraft) を考へた。カントは再生的想像力と區別する爲に之を創生的想像力 (Produktive Einbildungskraft) と名け或は純粹想像力と呼ぶ。これに依つて一方にあつては直觀的雜多、他方にあつては純粹統覺の必然的統一、此兩極端が融合統一を得る(S.133)。この純粹想像力に依つて悟性に從屬すると考へら

れた純粋概念たる範疇が感性的直觀に關係し來るのである。 Durch das Verhältniss des Mannigfaltigen aber zur Einheit der Apperzeption werden Begriffe, welche dem Verstande angehören, aber nur Vermittelst der Einbildungskraft in Beziehung auf die sinnliche Anschauung zu Stande kommen können. (S. 133) 卽範疇とは悟性に存する純粹認識ではあるが、悟性とは想像力に關係する限りに於ての統覺の統一作用であるから、想像力の純粹綜合の必然的統一を包含する。之を云ひ換へれば先驗的統覺作用の綜合的統一は、創生的想像力の綜合の中に統一作用を相立てることに依つて直觀の雜多に關係するのであるが、かやうな想像力の綜合的統一作用の形式こそは範疇に外ならぬと考へてもいゝであらう。

かやうに考へて來れば、悟性と感性とは互に密接な關係に立つことを知るであらう。併しこれと同時に吾々が今迄或意味に於て絕えず其周圍に回轉しつゝあつた困難な問題にこゝにも面接するであらう。それは卽感覺的所與が先驗的意識以外から與へられねばならないと云ふカントの見解である。かやうな見解が若し許されるならば先驗的統覺の綜合的統一が感覺的所與に關係しなければならないと云ふ必然性は甚だしく減弱せしめられると思はれる。何者、全然其根源を異にする二

つの要素が如何にして必然的に統合し得やう。感覺的所與の中には先驗的統覺の統一に攝取し包容し得ない要素がないことを如何にして保證し得るであらうか。悟性と感性との必然性の說明も所詮は人工的を免れ得まいと思はれる。或はかやうな先驗的統覺の統一の中に包容し得るやうな感覺的所與は要するに對象構成の權能に與ることが出來ないものとして排斥せらるべきだと考へられるかも知れない、併し若しそうならば、かやうな包容せられない感覺的所與と包容せられ得るそれとの間に何等の關係は有しないであらうか。否更に進んでかやうな包容せられない感覺的所與とは抑々何を意味するであらう。包容せられない所與とはcontradictio in adjectoではないか。何者感覺的所與として許される以上は包容されることを豫想するからである。「素材(Stoff)は只、悟性に依つて結合せられ秩序付けられる」(S. 688)ことに依つてのみ意味を保有するからである。包容せられ得ない所與とは要するに無であると考へられやう。併し又包容せられる所與もcontradictio in adjectoではないか。何者既に全部が既に包容を其必然の運命として居るものを所與として立することは、そして包容の必然性に對抗する或外力を想定することは整合的ではないからである。併し包容するものを立する以上は包容せられるものを豫想するが故

に、何等かの意味に於て、兩者は對立的の意味を持たなければならない。對立しながら內的に必然的に結合してあらむが爲には、それは特殊の關係に於て存しなければなるまい。かやうな關係をコーエンは相關(Korrelation)或は保存(Erhaltung)の關係に於て見出したのであらう。カントの雜多の綜合的統一に於て相關の概念を把捉したコーエンの思想は深き暗示を我々に與へる。先驗的統覺の綜合的統一が直觀の雜多に關係し得ることは、夫自身の自發性、必然性、創造性に基くと思惟することが眞によく悟性と感性との內的關係の必然性を說明し得るのではなからうか。既にカントも直觀の中に既に統一の存することを說いて居ることは前に述べた所である。先驗的統覺と感性的直觀との結合は先驗的意識の內的必然性に基く。

十二

今以上述べたやうな立場から飜つてカントの先驗的演繹を再び顧るならばそこに多くの暗示を見出すであらう。我々の理解する所では、カントの先驗的統覺の自發性の中に所與性の原理との融合一致を見出さんとする。最も具體的な意識の根底に、形式と內容との云はゞ相關を認め、其內的必然性の發現の上に一切認識の成立

と價値との根據を見出さんとするものである。創造的活動と考へられた純我の中に、認識客觀性の根據を置かうとする。夫故に根源的な先驗的統覺の綜合的統一が純粹創生的想像力の綜合的統一となつて發展し、更に感性的直觀の綜合的統一に迄開展し行くことは、夫自身の內奥に潛める必然性に基くのである。如何なる意味に於ても、感覺的所與が意識以外から與へらるゝと云ふが如き心理學的立場を排斥することに依つて却つて認識の質料的要求を意識の中心に於て根據付けやうとするものである。感覺的所與が課題として解かるべき問題として、意識に對立し意識を云はゞ觸發して、意識の眠を覺ますのではない。意識は夫自身の中に創造性と自發性とを兼備へる。かやうな具體的意識の自發自展は無限の過程なるが故に、認識の過程は無限であると解する。それはコーエンの云ふが如く、正しく無限の課務である。

かやうな具體的意識を其最も直接なる本來の樣相に於て見た場合に、之を純粹統覺として、雜多の根源的綜合的統一と見る。純我の自己同一は一切認識の根底たるべき、論理的自同律の基く根據でなければならない。具體的意識は、併し乍ら、靜的統一でないが故に、雜多を自己の中に創造する統一であるが故に、統一自身が統一の中

に雜多を相立てると云ふ意味に於て、矛盾律の基く根底となるであらう。又統一と雜多との內面的連絡は水も漏らさぬ緊密さを保有するが故に、其相關の連續性の中に排中律の普遍妥當的價値は根據付けられる。更に具體的意識は自己の內的必然性に基く創造的發展をなすものであり、我は我自身の中に歸つて自己の根撥付けをなすものであるが故に、こゝに充足理由律の深き要求が明にせられやう。

カントは時空を直觀の形式と考へたと同時に既に其中に純粹統覺の綜合的統一性の協同を見出した。今我々の解する所に從へば、時空は夫自身一種の綜合的統一にして、根源的意識が論理對象の領域を去つて、數學的對象を作り出す場合に取る形式と考へる。時空の形式に依らなければ總じて數學的對象の構成は不可能なのである。之卽時空の先天性の基く所でなければならない。更に悟性の形式と呼ばれる範疇に至つては、卽自然科學的世界の成立する爲の根本形式根本豫想である。範疇とは要するに具體的意識の自己發展の一樣としての、綜合的統一の他の種類である。そは我々が自然と呼ぶ對象の世界が總じて成立する爲の必然的の形式であると云ふ意味に於て其先天性は根據付けられるであらう。

かくて我々は具體的意識の先驗的分析に依つて得たる先天的要素が、如何なる根

據、理由に依つて其先天性が主張せられ得るかを明にした。卽其先驗的演繹を成し遂げたのである。カントは先驗的演繹の kurzer Begriff を次の如く與へて居る。Sie ist die Darstellung der reinen Verstandesbegriffe, (und mit ihnen aller theoretischen Erkenntniss a priori) als Prinzipien der Möglichkeit der Erfahrung, dieser aber, als Bestimmung der Erscheinungen in Raum und Zeit überhaupt, —endlich dieser aus dem Prinzip der ursprünglichen synthetischen Einheit der Apperzeption, als der Form der Verstandes in Beziehung auf Raum und Zeit, als ursprüngliche Formen der Sinnlichkeit. (S. 683)

我々は多くの迂余曲折を經て、カントに於ける認識客觀性の基礎付けの第二段階たる先驗的演繹を如何に解釋し得るかの一方途如何に解釋すべきであるかの——甚だ論述が不徹底且つ不充分であつた爲に、かやうな解釋の受け容れらるべき必然性が、如何なる程度に於て主張せら得るかに就いては、自分自身に取つても、甚だ心元ないのであるが——方向を說述し得た積りである。併し乍ら先驗的演繹の段階に於ては、單に先天的要素の先天性の基く根據理由が明にせられたに過ぎない。未だ夫等要素の相互間の論理的關係——全然それを度外視して先驗的演繹は行はれ得なかつたけれども——が、詳しく規定せられることは出來なかつた。又他の言葉で

云へば先驗的意識の綜合的統一が一切認識の客觀性の根據であり、從つて可能的經驗の對象、總じて客觀の世界に必然的に關係し得る根據理由は明にせられ、先天的要素が如何なる理由に依つて客觀界構成の根本豫想となり得るかを明にしたのであるが、吾々は更に進んで如何にして如何なる道程を踏むことによつて客觀界が成立し行くかの方法論的問題を論究しなければならない。此處に至つて悟性と感性との關係が本來の問題として現はれる。此論究は、我等の解釋に從へば、如何にして、又如何なる方法に依つて具體的直接的意識は內的必然性に依つて可能的經驗の對象界を構成し行くかの方法論的論究である。カント認識論に於ける認議客觀性の根據付けの第三の而して最後の此段階を假りに可能的經驗の段階と名けたいと思ふ。こゝに於て吾々は進んで其論究に移らねばならない。（未完）